

阪

神・淡路大震災の復興も半年を越えたのに、いまだに避難所の解消もままならず、仮設住宅では孤独死や自殺が後を絶たない。恒久住宅や雇用確保等これから先も不透明で人生再設計もできないで途方に暮れる



とび出せ! AMDA
菅波茂 = 編著 / 厚生科学研究所 = 発行
〒03(3400)6070
四六判・269頁 / 1800円(税込)

評者
牧里每治 まきさと つねじ

大阪府立大学教授

人たちもいる。阪神・淡路大震災は被災者
救援者それぞれのドラマにことかかない。

AMDA (アマダ) の阪神被災地区の救援
活動も災害救助のあり方を考えさせるメッセ
ージをもった活動である。正直に白状すると

書評する筆者も阪神・淡路大震災で活躍する
AMDAの新聞記事にふれるまでは何も正確
には知らなかった。AMDAの正式な名称は、
アジア医師連絡協議会といい、アジアの医師
たちを中心とする地域的な災害救援活動を行
うNGO(非政府組織)である。本書は、A
MDAが被災地長田区で行った救援活動のド
キュメントであり、AMDAのこれまで国際
的救援活動のフリーフィンクである。

AMDAは、被災地神戸に最も早く救援に
入った民間団体ではないだろうか。地震発生
の一月十七日の午後には第一次医療チームを
組織し、午後十一時には長田保健所に現地事
務所を設置し、翌日には救援活動を開始して
いる。そして長田区内の病院と診療所の外来
再開が半分以上になった頃を見はからって、
二月十六日には一カ月に及ぶ全活動から撤回
している。疾風のように現れて、疾風のように
去っていくAMDA。救援活動の機動性と
いい、被災地である地元の自立性、自主性の
尊重といい、救援者の被災者との関係の取り
方は見事というほかはない。

菅波によると、AMDAの理念は「良き医
療、良き将来」であり、具体的戦略(方法論)
は、「相互理解、相互支援、相互幸せ」なのだ
そうである。その基本にあるのは、「相互扶助
思想」とされている。第二部の「国際緊急救
援の軌跡」を読めば、弱小NGOであるAM

DAがどのようにして国境を越えた緊急救援
活動ができるようになったかが述べられてい
る。国連に認知された国際NGOに劣らない
活動を展開するには、被災地のローカルNG
Oもしくは現地医師と日常的に連携・協力関
係を結んでいなければならない。リージョナ
ルNGOとしてのAMDAが設立された経緯
をみると、岡山大学のアジア医学研究からは
じまり、アジア医学生との交流の積み重ねのな
かから、アジア医師の連絡協議会に至ってい
る。顔の見える国際交流のなから相互緊急
支援の活動が必然的に生まれてたのである。

第一部の「阪神大震災救援の記録」は、菅
波の概況説明とAMDAにボランティアとし
て関わった人々の眼に映った被災現場の状況
と彼らの活動と思入れが語られている。A
MDAといえは医師や看護婦だけのボランテ
ィア活動と思いきみがちだが、事実はそうで
ないことがよくわかる。およそ一カ月の震災
救援活動に関わったボランティアは、延べで
二九二一人、実人員で一〇八九人である。医
師・看護婦は、それぞれ実人員では二八八
人の医師、一五一人の看護婦で、大半は運転手
から救援物資の仕分けを担当した一般ボラン
ティアである。緊急救援の三原則や被災発生
後の時系列対応策等、防災や応災への組織的
・計画的取り組みと機動性のあるAMDAの
経験則は学ぶ値打ちがあるはずである。